

# 意図された「誤読」

— 荻生徂徠の「水足氏父子詩卷序」の矛盾、そして朝鮮

イ ヒョウオン  
李 暁源

## 1. はじめに

今まで荻生徂徠に関する研究は主に日本政治思想史の中で行われて来て、対外認識との関連性など、徂徠の思想が持つ東アジア的な意味についてはあまり注目されていません。しかし通信使や朝鮮との関連性は徂徠学派全体に見えます。特に徂徠学の成立に朝鮮通信使の存在が深く関係していると思われます。この発表の主な分析対象である「水足氏父子詩卷序」に現れる、徂徠が意図したと思われる「誤読<sup>1</sup>」も、この文脈で解釈できると思います。

「水足氏父子詩卷序」は水足氏父子の詩卷に書かれた序文です。この発表では徂徠の序文と水足氏父子詩卷の内容が相反することを明らかにし、なぜこのような「誤読」が起きたのかをその前の時期を含めて明らかにしたいと思います。

序文とはその書の内容を包括的に書くと同時に、序文を書いた人の学問的立場や視角を示します。故に「水足氏父子詩卷序」を分析することによって徂徠の朝鮮観も共に浮かび上がると思います。

まず水足氏父子の詩卷について検討したいと思います。

## 2. 「水足氏父子詩卷序」と『航海唱酬』

「水足氏父子詩卷序」は『徂徠集』巻8に収録されている作品で、1721年2月頃の作です。先学の研究によれば、「水足氏詩卷」は東京都立図書館蔵の『航海献酬録』および関西大学総合図書館蔵の『航海唱酬並筆語』と推定されてきま

したが、そこには徂徠の序文は載っていません<sup>2</sup>。しかし『航海献酬録』の異本である熊本県立図書館上妻文庫所蔵の『航海唱酬』を確認したところ、その序文（「航海唱酬序」）と「水足氏父子詩巻序」は同一であり、『航海献酬録』の序文が「水足氏父子詩巻序」であることが判明しました。

『航海唱酬』は水足屏山（1671～1732）とその息子の水足博泉（1707～1732）が朝鮮通信使に出会い、取り交わした筆談と詩をまとめた筆談集です。水足屏山は、名は安直、字は仲敬、号は屏山、成章堂。熊本藩の儒学者であり、浅見綱斎に師事した朱子学者です。『史綱』、『屏山詩稿』、『尚斎先生実紀』、『山崎先生行実』などの著述があります。1732年、家に押し入った賊に切られ亡くなりました。水足博泉は、名は安方、号は出泉、博泉。屏山の長男で、父の跡を継いで熊本藩に出仕しました。幼い頃から詩に優れ神童と呼ばれたそうです。享保通信使に会った時はわずか13歳で、製述官の申維翰に字を斯立、号を博泉と与えられました。26歳の時、父が亡くなった際の対応で叱責され士籍を剥奪され、自殺しました。徂徠集に水足親子宛の書簡がそれぞれ2通ずつ収められています。

『航海唱酬』の内容はこのあと検討することにして、先に徂徠の「水足氏父子詩巻序」の内容を検討してみたいと思います。

### 3. 「水足氏父子詩巻序」の内容

序文は徂徠の幼い頃の思い出から始まります。

わたくしは幼いときに祖母から、次のように聞かされた。「肥後の国は高麗門があるぞよ。豊王（豊臣秀吉）が三韓（朝鮮）に攻め入った頃に、肥後のさきの殿様で加藤（加藤清正）という者があって、先鋒を務めて、武勇の功績が一番すぐれておったぞ。今でも高麗の者どもは、子供が泣きわめくのを叱るとき「鬼將軍がくるぞ」と言えば、子供は涙を流しても泣き声をたてなくなるそうじゃ。この御方を羅刹・夜叉・鬼神の類になぞらえ

るほどに、その猛々しく勇ましい力に恐れおののいているのがよく分かる。日本に戻るときに、この御方は陥れた相手方の城門を持って帰って、戦勝の記念碑としたのだよ。」祖母は、この高麗門を実際に見て、その姿かたちが巨大で珍しいことを知っていただけでなく、また父老や年長者から、かれらが目にしながら、世の中に伝えられていない鬼將軍の戦場における事績を聞いていた。

肥後に関することは、最初はわたくしの母方の従姉妹が肥後の藩士水間氏の息子に嫁いだのだが、祖母は従姉妹が外孫であるにもかかわらず、とくに寵愛していて、舅・姑・夫となる人々にどう仕えているかを見極めるために一緒について行き、三年の間かの地に逗留していた。江戸に帰ってきてからは、かいまきのなかのわたくしに鬼將軍のことをあれこれ語っては慰めとしていた。わたくしが眠りかけたとき、夜ごとにいつもそうであった。いまから四、五十年前のことであるが、祖母の声ははまだ耳に残って忘れられないでいる<sup>3</sup>。

徂徠が幼い頃、祖母はしばらく肥後で暮らしたことがありましたが、この頃肥後の人たちから文禄慶長の役の時、朝鮮で「鬼將軍」と呼ばれた加藤清正について聞いたのです。そして彼が朝鮮で戦利品として取り外してきた高麗門について知るようになりました。幼い徂徠の心に祖母が話してくれた鬼將軍の活躍は非常に印象に残ったようで、いまだその声が耳に残っていると語っています。

そののち、僧侶となった従弟の香洲が西国をめぐる帰ってくると、近頃、肥後の国は才能ある人士が多いと語ったが、わたくしはまだそんなことはあるまいとして疑っていた。ここ五、六年のことが、藪（藪慎庵）・墨（住江滄浪）の二君と知り合うようになって、二人ともに古典を深く探求して詩に道を遊んでおり、その著述も風雅を極めていくことを知り、わたく

しは驚き、いぶかしく思うようになった。

去年になって、肥後文学である水足君（水足屏山）という者が、藪君を仲介として遠く書簡をもたらし、わたくしの言葉によってその詩巻を飾りたいと要請してきた。詩巻をひらくと、水足君が息子を連れて浪華の客館に韓使を訪ねたおりに応酬した詩であった。文学の園において対陣し互角に渡りあい、勇気を奮って勝ちを争い、勇ましくも負けることをよしとしなかった。ここに至ってわたくしは、長いことため息をつき、次のように述べる。ああ、肥後と韓の人々は、昔は武力によって争い、今は文字によって競っているが、これはまさに世の中がよく治まっている効験にほかならない<sup>4</sup>。

ここでは「水足氏父子詩巻」を手に入れた経緯について語っています。肥後の藪慎庵と住江滄浪は熊本朱子学派と呼ばれた朱子学者です。藪慎庵の紹介で徂徠はこの詩巻を入手することができました。熊本藩では崎門派の朱子学に従い崎門派に劣らず退溪を尊崇する風潮がありました。大塚退野（1678～1750）、藪慎庵（1689～1744）、藪孤山（1735～1802）を始めとして、明治維新の頃活躍した横井小楠（1809～1869）、元田永孚（1818～1891）などが代表的な人物です。屏山も熊本藩の文学として朱子学を尊崇していました。

徂徠は屏山が通信使に会って詩を交わす時、「勇気を奮って勝ちを争い、勇ましくも負けることをよしとしなかった」と言い、通信使と屏山が激しく論争をしたように書いています。

肥後には鬼將軍が武力による功績を挙げてから、その遺風が国の風俗に残されていることは、前々から聞き及んでいるところである。だから武芸によって頭角をあらわした大將は数限りなくいるに違いない。しかし、今の時世はそうではない。太平の世の中が百年も続き、加えて憲廟（徳川綱吉）による学問を重んじた治世が全国の隅々にまで行きわたっている。そ

れゆえ文学の才能に溢れた者が輩出することも、中土（中国）にも劣ることはない。昔の争いは武士によったが、今の争いは君子によるのだから、この詩巻は高麗門のようなものだと言えるのではないだろうか。

文学による名誉が肥後の国中で重んじられていることは、もとよりわたくしが述べるまでもない。汗血馬のように勝れた者が日々に雄々しく進めば、どこまで進むか定めようもなかろう。ただわたくしが、祖母のことがまだ耳にのこっていたために、肥後の風俗が大いに変わったことの原因を思いめぐらして、叙文として書くことにしたまでである<sup>5</sup>。

徳川幕府の成立・安定以来、日本には学問を重視する風潮が生まれ、これにより漢文に優れた人物がたくさん輩出されて、その水準は中国にも劣らないと言っています。古文辞学で一家を成した徂徠の自負が溢れる発言だと思われま

す。この作品は幼い時の回想から始め、過去と現在を行き来しながら、戦争の闘いと平和の筆談を対比させ、水足父子の詩巻を戦利品としての高麗門になぞらえています。文学作品としても緻密に構成されている点が興味深いと思います。

1592年の文禄慶長の役と、1719年の通信使交流というまったく無関係に見える二つの事件に通底しているのは「戦争」、即ち「たたかい」です。徂徠は通信使と日本文士の交流を「いくさ」と見なしているのです。このような、筆談を戦争と見なし文で相手を屈服させるという、いわゆる「文戦」という発想は中国や朝鮮の文人にはあまり見られない独特な発想だと思われま

す。以上の内容は次のように整理することができます。

文禄慶長の役	筆談
武士の戦	君子の戦
戦利品	筆談集
高麗門	水足父子詩巻
いくさ	

筆談集を高麗門になぞらえつつ、水足父子が通信使と激しい論争を行い、屏山が通信使を破ったように書いています。しかし、筆談集の内容は真逆であります。筆談集の内容の検討に移ります。

#### 4. 筆談集の内容

屏山は予め質問を書いてきて通信使に渡しました。質問は主に朝鮮の朱子学に関する事で、特に退溪に対して屏山は尊崇の念を持っていたと思われま

屏山：聞朱子『小学』原本行于貴国、不勝敬羨。弊邦所行、則我先儒闇齋山崎氏抄取『小学集成』所載朱子本註、而所定之本也。貴国原本与集成所載本註、有増減異同之处耶？

青泉：朱子『小学』、則我国固有刊本、人皆誦習而專尚朱子本註耳。貴国山崎氏所抄書未及得見、不知其異同之如何耳。

屏山：『近思録』亦貴国有原本而行耶？葉采之所解、貴国書生読、以資其講習否？

青泉：『近思録』亦有刊本、而葉氏註、諸生皆講習耳。

屏山：貴国儒先寒暄堂金宏弼、從佔畢齋金氏而学、佔畢齋何人耶？名如何？

青泉：佔畢齋金氏諱宗直。

屏山：貴国『儒先録』所載李晦齋「答忘機堂書」、其言精微深詣、実道学之君子。我国学者、仰慕者多。晦齋所著『大学章句補遺』『続或問』『求仁録』未見其書以為憾。顧必其書各有立言、命意之別、願示大略。

青泉：晦齋所著『大学章句補遺』、則大意在於「止於至善章」・「本末章」、句有所疑錯而為之。然先生亦以僭妄自謙、不広其布、後生之得見者蓋寡、今不可一一枚挙。

筆談の内容は主に『小学』、『近思録』、『大学章句補遺』など、主に朝鮮の朱

子学に関する質問である。

屏山：僕嘗読退溪李氏「陶山記」、已知陶山山水之流峙、不凡之境耶。聞陶山即靈芝之一支也。今八道中属何州郡耶。陶山書堂・隴雲精舍等、尚有遺蹤耶？

清泉：陶山在慶尚道礼安県、書堂・精舍宛然猶在、復立廟宇於其傍、春秋享祀。

屏山：李退溪所作「陶山八絶」中有「邵説青天在眼前、零金朱笑覓爐辺」之句、「零金朱笑」何言也？

清泉：「零金朱笑」未及詳、或詩家別語。

屏山：嘗看貴国石刻書殘欠、僅在紙半片者、題曰「宋季元明理学通録」、其下記為「退溪李氏所著」。不知有全書否？有則願教大意及卷数。

清泉：『理学通録』我国即今之所罕伝闕之。

屏山：『東国通鑑』、貴国必当梓行之書也。聞無此書、不知然否？

清泉：『東国通鑑』、尚有刊本行世。（「航海唱酬序」、7b～10a）

この筆談では李退溪の陶山書堂、退溪の詩及び朝鮮の歴史について質問しています。これがほぼ筆談の全体の内容です。そして屏山は息子の博泉を申維翰に紹介して号を与えることをお願いしました。申維翰の『海游録』にこの状況が記録されています。筆談集にはこの時申維翰が博泉に書いてあげた「字号説」が収録されています。

一童子年十四、面目如画、操紙筆而前、手談及韵語、咄嗟而成、自言水足氏、安方名、家在北陸道千里外、与其父屏山者偕来、蓋欲鳴藝於使館。余為撫頂而呼曰「神童神童。」其父大驩、請命字号。余謂水足氏、応溥博淵泉之義、号曰博淵、安方者、有足踏大方之象、字曰斯立可矣。別艸記以給、其父子俱稽顙謝。… 諸人各以筆札示之曰、昔聞大明時、張寧使貴国、貴国文学才士、多蒙獎許以著名、足下今日之張天使也。（『海游録』、9月4

日)

「博淵」は「博泉」の記憶の誤りによるものだと思います。申維翰は『中庸』の「溥博淵泉、而時出之」の句を以て号を与えました。筆談集によれば、申維翰を明の使者張寧に寄せたのは屏山でありました。

このように筆談の内容は主に屏山の朝鮮朱子学に対する質問であり、和気あいあいとした雰囲気であったと思われます。熊本朱子学者の一員として退溪や朝鮮朱子学者に対する関心を持つのも無理はないと思います。

## 5. 「誤読」の理由

「誤読」の理由は徂徠の通信使批判の文脈で理解できると思います。故に徂徠学の興起のきっかけになった徂徠の通信使批判に注目する必要があります。1711年正徳通信使の訪日の時、徂徠の門人である山県周南、安藤東野、本多猗蘭が筆談をしました。幕府に仕えた林家の主導により全国の筆談を集めて出版した『鷄林唱和集』（1712.5刊）と、その続編であり、木門（木下順庵）が中心となった『七家唱和集』（1712.12刊）に徂徠学派はほとんど収録されませんでした。なぜならば、朱子学に批判的な徂徠学は既存の朱子学者には警戒の対象であり、さらに通信使と余計な葛藤を起こす恐れもあるからだと思われます。しかし徂徠は林家や古義堂の妨害を押し切り、自派の筆談集『問榘畸賞』を出版する執念をみせます。徂徠の名を世間に知らしめたと言われる初期の著作『護園隨筆』（1714）、『譯文筌蹄』（1715）の前に『問榘畸賞』（1712年冬以後）の出版があったのはあまり知られていません。

『問榘畸賞』で徂徠は通信使の詩は宋元の旧弊を踏襲したと激しく批判し、護園の古文辞の優越性を語ります。日本の知識人の間で通信使が持っていた権威を破ることによって、徂徠学派の名は世間に広く知られるようになったと思われます。



## \*『問榘畸賞』の通信使批判の論理

### (1) 序文、跋文

「畸賞」は筆談集のタイトルとしてはめずらしいですが、序文ではその意味について語っています。護園を無視する他学派に対する反発、通信使と他学派に対する優越感、護園学派のプライドが現れています。

序文では護園学派の詩は三唐に譬え、通信使の詩は醜い容体の代表で『莊子』に登場する支離疏と哀駘它に譬えています。つまり、支離疏－哀駘它－通信使－畸（奇形）のことで、通信使の畸によって護園の詩文が輝くと言う内容があります。

其塵垢粃糠將猶陶鑄三唐者、何況韓人乎…支離疏之頽隱於齊、會撮指天、哀駘它之以惡駭天下。豈不皆問榘之畸賞乎？（田中桐江、序文）

跋文では、雷のように登場した護園学派を通信使が見それていることを、「聾者」に寄せています。これは、護園の登場を無視する日本文士に対する批判でもあります。

雷霆之旧発也、則能驚物、而聾者恬焉、於文亦然…世之内荏者、一遇雷動、輒避諸密室中、而詫其不怯。非聾而学聾、均之聾耳。（服部南郭、跋文）

### (2) 書簡

書簡では通信使、朝鮮に対する優越意識が現れます。

本月十日夜帰、燭下得足下書、急破緘展眎、則足下与韓使相酬和詩及官禁嚴不得入者状、宛乎在目、想足下其時作何態、遂至失笑也。好事癖、一至于此耶。足下憧憧為利往來、嗚呼当今世不可無足下矣。… 夫三韓獷悍、見照称于隋史、而不能与吾猿面王争勝也。後來迺欲以文勝之、則輒拔八道

之萃、從聘使東來、猶且不能勝足下而上之矣。往昔唯新羅女王一篇、收諸『品彙』中、今則其南姓者、稍為彼善於此耳。去年來、一国人如狂、吾不知其何為而然也。晁卿之雄、与謫仙摩詰相韻頡、距未千歲、迺至憚此輩為、何其衰也。使人嘆息泣下。(「与江若水書」)

徂徠は通信使と酬唱するため寄り集まる文士達を、名利を追う者としてけなしています。朝鮮は日本の武威に屈服した弱い国でありながら、文を持って日本に勝とうとするが、護園の登場により今や文学に於ても日本に屈服したと述べています。ここでも筆談を「戦争」になぞらえているのがわかります。通信使の詩は宋元の旧弊を踏襲したと言い、護園の古文辞の優越性を語っています。

及取子徹（入江若水）書所附西人詩以讀之、迺又爽然自失焉。亡論其卑靡、一沿襲宋元之旧、是自三韓土俗使然。即其和子徹詩、猶且不能變子徹意而發之、窘窘乎既受病于韻与对之間、是未可以和子徹之詩、而况对足下壘也乎。(荻生徂徠、「來翁与渠生書」)

### (3) 評語

評語では通信使に対しては酷評し、護園は過度に評価することによって、通信使との比較による護園の優越性を強調しています。

通信使：「這甚俚語」、「其詩債可笑也」、「但乏古雅、更缺韻色、僅足与若水抗衡耳、詎謂次公之敵。」、「似工却醜、宛然宋人、面目可憎。」

山県周南：「雄麗無比、元美莫過」、「大氏次公七律、色沢似仲默、神理宵于鱗、而骨格原諸右丞、所以為妙。」（元美は王世貞、仲黙は何景明、于鱗は李攀龍、右丞は王維）

## 6. おわりに

1711年通信使の訪問の時、徂徠は、これまで日本の知識人が通信使に認められることによって日本中に名を知らしめることができたのを逆利用し、通信使を激しく批判することによって、新生学派であった徂徠学派の名を世間に知らしめることができたと思われます。その批判の根拠は学問的自信（文明的優越意識）と武威による蔑視（武威による優越意識）の二つではないかと思われます。『問槎畸賞』が出版された後、約7年後日本を訪問した通信使と水足父子が交わした筆談を、徂徠は自身の通信使批判の論理のなかで意図的に「誤読」したのであります。

徂徠の通信使批判の論理は、太宰春台、服部南郭など、門人たちに継承されていきます。このような視座で寛延通信使（1748年）や宝暦通信使（1763年）と徂徠学派との筆談を検討する必要があると思われます。

### 【注】

- 1 誤読は現代では主に「誤って読む」の意味で使われているが、その意義素は「間違ったやり方で解釈する」であり、「故意に間違った解釈を与えることによって生じる誤解」である「曲解」や、「事実を誤って伝える間違い」である「歪曲」の意味も含まれている。「意図された『誤読』」とは、このような故意性に着目した言葉である。
- 2 沢井啓一他訳注、『徂徠集 序類2』、平凡社、2017年、59頁。
- 3 余幼時聞之、太夫孺人云、肥有高麗門、蓋當豊王之征三韓、肥之先侯、有加藤氏者、爲冠軍、驍勇功最矣。高麗人至今猶以怖兒啼、曰鬼將軍來也。兒遇泣而不啼、其比諸羅利夜叉噉人類、威武所攝伏可知已。及其歸也、以所屠陷城門歸、以爲京觀云。太夫孺人猶尙及躬親見之、識其材鉅麗詭異者狀、又旁聞父老長者所親視鬼將軍戰時、它遺佚事多世所不傳者。初余之内姊嫁肥士水間氏之子、太夫孺人、以其爲外孫女、絕鍾愛之、携以往、觀其所以事舅姑若君子何如也、因留三年、迺歸。歸則時時顧余輩襁褓中、語鬼將軍事、娓娓乎弗已、以相慰藉。其將睡時、每夜率以爲常、距于今四五十年、言有在耳弗忘也。（現代語訳は沢井啓一他訳注、『徂徠集 序類2』、平凡社、2017年を参照）
- 4 其後内弟僧香洲西游歸、迺謂彼中人士、近多彬彬焉、余猶且怫然疑之、及於五六年來、與藪・墨二君相識、皆湛涵墳籍、翔泳南雅、其所著述、頗翩翩有致也。余始駭然異之。越客歲、文學水足君者、迺价藪君、千里辱書問、請余言弁其詩卷、披之則携其兒郎、邀韓使浪華館中、與相酬和者也。對壘文苑、旗鼓相當、賈勇爭勝、矯不肯下。余於是乎喟然嘆息久之。嗚乎、肥人之於韓、昔以武爭、今則文爭、豈非世治亂之效也。
- 5 夫肥、自鬼將軍以威武振于海表、而流風餘韻、被於邦俗。以余之所素聞、武藝相雄長、稱大師者何限。今則否、昇平百年、加以憲廟右文之治。蒸蒸乎罩遐方、才者輩出、不讓中土。昔之爭也武夫、今之爭也君子、曾謂斯卷不若高麗門乎。文學之選、譽重一邦、固無埃余論、而汗血之駒、駸駸日

上、亦何以能定其所底止也。独以太大孺人之言猶在耳、而惟夫肥俗之所以丕變者、書以爲敍。

## 参考文献

- 沢井啓一 他訳注、『徂徠集 序類2』、平凡社、2017年。  
日野龍夫、『服部南郭伝攷』、ペリかん社、1999年。  
藍弘岳、『漢文圏における荻生徂徠』、東京大出版会、2017年。  
杉田昌彦、『問樞畸賞』の序跋について、『季刊日本思想史』第49号、ペリかん社、1996年。  
李暁源、『18世紀徂徠学の興起と通信使』、『朝鮮通信使研究』vol.21、朝鮮通信使学会、2016年。  
李暁源、『1719年筆談唱和集『航海唱酬』を通して見る日本知識人の朝鮮観』、『古典文学研究』vol.41、韓国古典文学会、2012年。

## \* 討論要旨

勝又基氏は、「水足氏父子詩巻序」の内容について、「文学の園において対陣し五角に渡りあい、勇気を奮って勝ちを争い、勇ましくも負けることをよしとしなかった」としているが、徂徠としては打ち負かしたという意味なのか、頑張ったというくらいの意味なのか、と質問した。発表者は、文禄・慶長の役に喩えていることや『問樞畸賞』の内容、徂徠学派が朝鮮よりも文に関して優れていると考えていたことを踏まえると、勝っていると考えているのではないかと回答した。勝又氏は、文を素直に読むと打ち負かしたとまでは言えないのではないかと感じた、と述べた。但し、徂徠に優越感があったことは確かであるし、熊本は朝鮮出兵と深い関わりがあるので戦いに準えた、という点は賛同しているとした。加えて、熊本の朱子学者にとって朝鮮通信使はアイドル的な存在であり、そこに駆けつけて、その人々と応酬し、詩文を持ち帰ったというだけで凄いという雰囲気はまだこの時代にはあったのではないかと指摘し、そう考えると、水足と徂徠とで意識が大分異なるのではないかと述べた。また、徂徠と水足はそこまで親しくないと思われることから、序文を寄せる＝挨拶・お世辞的な要素もあるのでは、とも指摘した。発表者は徂徠と水足屏山の関係性についてさほど詳しくないと断りつつ、屏山の息子と徂徠の手紙のやりとりは『徂徠集』にも残っており、徂徠の影響も受けたのではないかとと思われることから仲が悪かったとも言い難い、と回答した。

山下則子氏は、徂徠学派に対して、昨今、日本の近世の学会において着目され、高い評価を受けている中、通信使を利用して自分たちの学派を伸ばしていったのだというのは興味深い視点である、と述べた。発表者は、利用したというのは悪い意味ではなく、徂徠の頭の良さや時代を読んでいることが窺え、また、朝鮮通信使を過度にアイドル的に扱うことにも不満があり、そうした雰囲気も転換させたかった意図もあったと考える、と回答した。『問樞畸賞』のように激しく批判したものは他になく、これに関しても何らかの意図があったと思われる、と答えた。

司会の河野貴美子氏は、『問樞畸賞』については執念を燃やして出版したということであったが、「水足氏父子詩巻序」が付いた資料は写本しかなかったのか、出版に至らなかった理由はあるのか、と質問した。発表者は、単独では出版されなかったが、1719年に林家によって出版された筆談集には一部収録されている（但し序は入っていない）、と回答した。